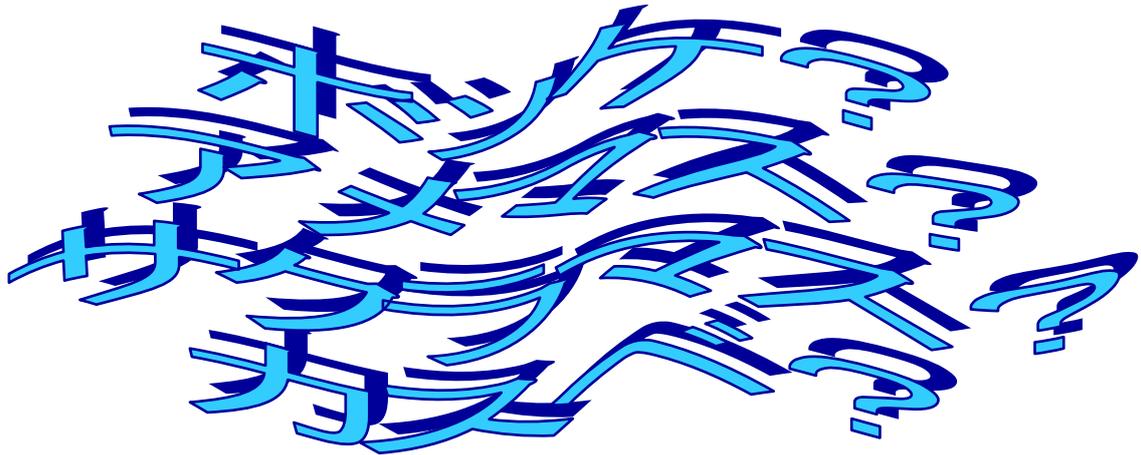


釣れ釣れなるままに

2006年思い出の釣行記 PART. 2



鹿島釣狂

ホッケにふられ

☆釣行日 平成18年5月4日
☆入釣場所 岩内港フェリー岸壁
☆釣果 なし

家族で積丹をぐるりとドライブして岩内温泉に1泊する。ホテルは岩内スキー場の麓にあり、屋上に設置された双眼鏡からは岩内の街並みを一望することが出来る。早速、覗き込み、岩内港を偵察すると、岸壁に釣り人がびっしりと入っている。そして、明朝のホッケの爆釣を確信して、早々に枕を抱いた。

早朝、目覚ましの音で私と息子は跳ね起きたが、防寒具や長靴まで用意して楽しみにしていた義父は、体調が悪くて行かないと言う。後からよくよく聞いてみると不自由な足を抱えて迷惑をかけてはいけないと思ったらしい。道中、私が何度か車を止めて、積丹の岩場の先端で釣りをしている様子を見ていたので、自分には無理だと感じたのだろう。釣り場は岸壁に車を止めて、そのすぐ前だと伝えておくぐらいの配慮をすべきだったと後悔する。

岩内港は初めてである。息子と岩内港フェリー埠頭岸壁へ向かうが、なかなか大きな港である。釣り人が岸壁に隙間無く入って、サビキでホッケを狙っている。その中で一カ所だけ歓声が上がり、その界限の10名ほどが喜々としていたが、他は全然だめなようだ。

丁度、出っ張りの一角(C点) が空いていたので、そこに入釣する。はぐれホッケでも来ないかと構えているが全くアタリが無い。爆釣を夢見ていた私とは違い、息子は1匹でも釣れば御の字だと思っていたようだが、結局、そのはかない希望も叶わず、付けエサの甘エビは二人の口の中に入ることになった。



左方向に見える岸壁には釣り人が隙間なく入っているのだが……。アタリはさっぱり無い。遠くの山々はまだ雪で真っ白である。



右方向に見える岸壁にも人、人、人……。何故だかこの一角(C点)だけが空いていた。

サクラマスにふられ

☆釣行日 平成18年5月7日
☆入釣場所 増毛町舎熊駅海岸
☆釣果 なし

2時半起床。増毛港の様子を見に行く。サビキでホッケを狙った釣り人がいたが、昨晚から入ってポツラポツラという状態で、ホッケの群れは来ていないという。本日は、ホッケのエサは用意していない。サクラマス狙いなのだ。

私は海でのマス釣りはあまり興味が持てなかった。しかし、マス釣りの魅力に取り憑かれた同僚の法螺話を何度も聞いているうちに、なんだか魅惑的で自分にも出来そうに思えてくる。ルアーは同僚に聞いてオオナゴやイワシカラーのミノー18gを中心に買いそろえておいた。

4時半、舎熊方面に向かう。同僚から聞いていた所とは違うが、朱文別川河口付近で、2名のルアーマンがいたのでご一緒する。しかし、アタリらしきものは感じられない。そこへまた新たに2名が加わった。遠別で釣果がなかったため、ここに様子を見に来たとい

うのだ。しかし、アタリらしきものは皆無だった。

6時、舎熊駅前に移動する。ここにも3名のルアーマンがいたので、頑張ることにした。ルアーの種類を変えながら遠投に心掛ける。飛距離が出るようになり、方向も定まってきたがアタリはやはり出ない。遠く信砂川河口付近で竿を曲げている釣り人がいたので駆け寄ってみると、45cm程のきれいなアメマスだった。アメマスでもよいと続けるがやはり私のルアーには全く反応がなかった。

☆釣行日 平成18年5月12日(金)、13日(土)

☆入釣場所 遠別町富士見海岸

☆釣果 アメマス 55cm 1

クロガシラ 35cm以下5

カジカ 42cm以下3

カンカイ 38cm以下8

アメマスを手にする

サクラマスの感触を是非とも、2泊3日でオロロンラインを北へ北へと遡る釣行計画を立てた。勤務を終えて早々に職場を退勤し、ホッケやカレイにも対応できるようにとエサを買いそろえてから増毛港に立ち寄った。15名程がホッケのサビキ釣りをしており、その端に竿を構えたが、釣れているのは一カ所わずか2メートル幅ぐらいしかなく、早々に断念する。増毛港で100匹のホッケを釣ってからアメマス、サクラマスをとという目論見は初っ端から崩れてしまう。

辺りが薄暗くなりはじめると、ホッケ狙いの釣り人からヤリイカ狙いの釣り人に替わった。エギを飛ばして静かに引いている姿はなかなかの趣があるものだ。しかし、その竿が10本程のギャング針が付いた竿に替わり、ヤリイカが浮いてくるのを待っている。集魚灯の光に誘われた小魚を食いに来たヤリイカをギャング針で引っかけるという荒技だ。ヤリイカが見えると、それに向かって投げ入れて引っかき回す。「ヤリイカ1杯200円で売っていた」と豪語するが、これが釣りといえるものだろうか。

先日の舎熊釣行で聞き及んだ遠別に向かうことにする。北海道新聞社刊行の空撮による釣り場ガイド誌をたよりに、釣り公園となっている防潮堤脇の砂浜(E)に辿り着いた。打ち寄せる波は高く、夜目でも潮が暗褐色に濁っているのが分かる。朝方には波が落ち着くのを期待しながら仮眠する。午前2時、釣り人は誰も見当たらず、波の状況も芳しくないで、サクラマス狙いは早々に断念し、カレイを狙って防潮堤(D)に上がりその左角で竿を出す。

すぐアタリがあり、30cm程のカンカイが来た。5月中旬にカンカイなど期待していなかったが何かの釣りものがあると元気が出る。25cm程の川ガレイも頻繁に竿を揺らす。



アカハラも含めて次々とアタリが出た。クロガシラまで来る始末である。

4時頃よりサクラマスねらいのルアーマンが砂浜（E）に訪れて、波の高さと濁りにため息をついては引き上げていく。防潮堤には地元の釣り人が次々と訪れ、にぎやかになってきた。

遠投していた竿が激しく揺れて、竿先が鋭い突っ込みをみせる。慌てて竿を煽ると、重量感たっぷりにグングンと海底目指して締め込み、クロガシラの大物と予想する。途中から右に左にと横に走る。アブラコだろうか？それにしても大物である。道糸は防潮堤の真下を差しているのだが、胸壁が高く獲物を見ることが出来ない。強引に抜き上げようとすると25号の竿が根元から曲がってギシギシ

と音を立てる。ギラリと光った白く大きな魚体が胸壁から躍り出て、私の前にドサリと落ちた。アメマスである。丸々とした胴体に艶めかしく浮き出た紋様が鮮やかに目に飛び込んでくる。ガッチリとハリが掛かった上顎には鋭い歯が並び、サンマのエサを銜えていた。メジャーをあてると55cmを差していた。カメラが車の中なので、フラシに入れて防潮堤の階段下に吊り下げておく。ルアーからエサ、サクラマスからアメマスに変わったが初期の目的はひよんな形で達成した。またまた激しく竿が揺れた。今度は35cmほどのクロガシラである。これも丁寧にフラシに入れておく。

カスベも手にしたが

午前7時、私の左に入った地元の人が竿を曲げて大声で叫んでいる。胸壁に身を乗り出し覗いてみると、大きなカスベが^{ひれ}鰭を打っている。そのまま引き上げるのは無理と判断して階段下まで誘導するよう促した。その辺に投げてある軍手を拾って階段下で待ちかまえる。途中、階段の突き出たコンクリート壁に道糸が擦れているので、それを避けるように言った。何しろ竿を操っている当の本人は大カスベが見えないのである。やっとの事で私の目の前に大カスベが来た。菱形の鰭にわずかにハリが掛かっている。「尻尾を掴め」という観衆のアドバイスがあったのでそうしようとするが、私自身も初めてのことで、ギザギザと左右対称に角の生えた尻尾を掴むのに躊躇してしまった。カスベはどうか知れないが、エイの仲間には尻尾に猛毒を持つものがあると聞いている。しかし、そこまで誘導した強い責任を感じて、恐る恐る尻尾を掴み、やっとの思いであげることが出来た。ホッと胸を

なで下ろす。

口がウルトラマンに出でてきたミグモ（ブースカ？）のようで可愛らしく、触ろうとすると、口が飛び出てきた。口の中からもう一つの口が出てくるSF映画の『エイリアン』のようである。リプリー（シガニー・ウィバー：ホラー映画の女性といえば悲鳴を上げて逃げるばかりであったが、芯が強く戦う女性という時代に即した新しいヒロイン像を演じた）が性的悪夢を具象化したというエイリアンと闘っている場面が映像として蘇った。咄嗟に手を引っ込めて事なきを得たが、観衆の一人が指をもがれることもあるのだと論してくれる。

メジャーを当てると80cmジャストであった。彼にはそれだけしか獲物がなかったのだが、仲間からは、「それだけで十分だ。刺身にして酒をひっかけたら旨いだろうな。もう帰って寝た方がいいぞ。」と冷やかされている。エサはアカハラであり、私が暗い内に釣り上げたものを使っていたのだ。私もカスベを狙ってアカハラを付けてみる。周辺ではそのアカハラのエサでカジカも次々とよく上がったが、それもピタッと止まり、しばらくアタリのない時間が続いた。

富士見の防潮堤は、砂浜から海に突き出たように整備され、釣り公園となっている。このためにどれだけの税金が投入されたのだろうか。地元からの要請があったのだろうか。今、ここで釣りを楽しんでいる人たちが要望したのだろうか。国の施策と地元の利害とが密接に絡まり税金の無駄遣いと思われることが至る所に見られるが、どうなのだろう。地元の釣り人とそんな会話をしていると、「この先には3軒の漁師のために素晴らしい港ができている。鬼鹿にもこれよりはるかに立派な釣り公園があるが、釣り人なんかほとんど見たことがない。俺たちは、毎日この釣りデッキを利用しているのだから、無駄遣いにはなっていない。」と主張する。

午前10時、今度は右隣に大物が来てあげられないでいる。胸壁から身を乗り出してみると大カジカが口をあぐりと開けていた。道糸を掴んでそろりそろりと引き上げてやると50cm近い大物だった。これを機にあちこちで再びにぎわいが始まった。後から私の左隣に入った地元の釣り人が先程のものよりは一回り小さいカスベを2匹も釣り上げた。私にも川ガレイに混じって、クロガシラやカジカ、カンカイが次々と釣れたが、なんだか寸足らずで物足りない。

エサが底をついたので、地元の釣具店に行き、一箱500円のイソメを奮発して3箱も買った。あわせて、獲物が大物のためにアタリがあってもハリがすっぽ抜けているような気がして、大きいハリの仕掛けを購入してみた。ついでに自分のエサをセイコーマートで仕入れて、夕方、そして明日の朝に備えて車で仮眠する。

バタバタと強風に揺れる窓ガラスの音で目が覚めた。黒雲が低く垂れこめ、突風が砂塵を舞いあげている。防潮堤に当たった高波が波飛沫を上げて降り注ぎ、防潮堤の上を伝って流れていく。海面を眺めると潮が黒く濁り、引きちぎられた海藻が周辺に漂っている。魚の乱舞ににぎわっていた釣り人たちも引き上げたようだ。一旦、釣りを休止することに

して階段下に吊り下げておいたフラシを取りに行く。アメマスは写真を撮った後放してやろう。

「ない！」 手摺りにつないだビニル性のロープが根元から切れている。高波や強風のせいでコンクリに擦れて切れてしまったのだろう。フロートが付いているので、まだ辺りに漂っているのではないかと捜すが見当たらない。魚の重さで沈んでしまったのかとフラシを入れた海底を仕掛けの付いた竿で探してみるが掛からない。そうこうしているうちに、明日まで釣り続けようという気持ちも萎えてしまって、全てを撤収する。

ルアーによるものではないが初めて海アメマスを釣ったこと、他人のものではあるが大カスベを引き上げたことを慰みにして帰途についた。